

## 『社会工学概論—21世紀への問題提起』 上・下

学陽書房, 昭和62年1月, B 6判294頁, 268頁, 定価 各2,900円

本書は筑波大学社会工学系設立10周年を記念して昭和60年12月に筑波大学において開催されたシンポジウムの記録と、主としてこのシンポジウムに参加した人々による20編の論説を合せて刊行したものである。本書の構成は次のようになっている。

序論 21世紀への社会工学—いくつかの問題提起 穴戸駿太郎

### 1部 シンポジウム

- I 国際社会と日本 司会 穴戸駿太郎
- II 日本的経営システム 司会 高柳 暁
- III 21世紀への都市・地域政策 司会 坂下 昇
- IV 新しい総合社会システム論 司会 山田圭一

### 2部 論説 公文俊平他計20編

社会工学は社会科学の諸分野に比較してその歴史は新しく、総合 (synthesis) の学問であるだけに、現段階では独立の学問分野として、広く社会に認知されているとは言い難い。評者の私見では社会工学はその理論体系も充分その基礎が固まったとは言えず、なおその発展の過程で形成された学際性、問題解決指向 (実証性)、未来 (政策指向) 型等の特性を軸に自らを主張するアイデンティティを求めてなお模索しているようにも考えられる。

かつて筑波大学の社会工学系に属し、その教育組織である社会工学類長として社会工学概論を担当していた評者は、今回のシンポジウムでの議論やすぐれた論説に深く敬意を表するものであるが、社会工学的視点はその参加者によって認識されているものの、その総合的学問の特性である学際的研究の成果がここに提示されているとは思えない点もある。たとえば先述の20編の力作がことごとく単著で、社会工学を志す研究者の研究報告としては若干奇異な感じもする。社会工学の研究成果として収録するとすれば、各々その学問的背景を異にする集団が1つの coherent な集団として具体的事例を中心に共著による正に学際的な研究成果を披露すべきではなかったろうか。しかし、かつて1970年代半ばに OECD の「日本の社会科学の研究」に関する調査団が日本のアカデミ

アにおける研究を指して、高度に“理論的”ではあるが、実践性に乏しく、日本の社会科学研究は総じて不毛であると酷評し、ただし筑波大学は例外であると讃辞?を呈したのは、筑波大学の政策指向型の研究者集団である社会工学系を認識しての発言であったと思われる。いずれにしても社会工学はモザイク的な社会科学の集合ではなく、その方法論としては社会システム論があり、しなやかなシステム論があるとすれば、その構築されるべき全理論体系をあらためて明示し、これを強く主張すべきであろう。今回シンポジウムとそれをベースにした本書はあるいはその方向への努力の成果を示す1つのマイルストーンをめざしたものと言えるかもしれない。紙面の関係で、その内容の個々について論評することはできないが、社会工学研究者の恐らく世界でも最大の集団である筑波大学社会工学系の教育を主体とする今回の労作は社会工学を知る上からもこの分野に関心と興味のある人々にぜひ一読をおすすめしたいと思う。(倉谷好郎)

### 事例研究の原稿募集!

ORの特徴は実践にあるといわれています。実践的な応用をぬきにした理論ということはORでは考えられません。本誌でも以前から会員の皆様からの事例研究の報告をお願いしてきましたが、まだ十分な成果をあげているとはいえません。

もっと気軽に、「この問題はこう処理したが、もっとよい方法はないか」、「やってみたけどなかなかうまくいかない」というような事例や問題提起をどしどししていただきたいと思えます。会員同士の知恵の交換というつもりでこの欄へのご投稿をお願いします。

原稿の長さ：学会原稿用紙36枚 (25×12行) 以内 (図・表のスペースを含む)

申し込み：学会事務局へ原稿用紙をお申し込みください。

(OR誌編集委員会)